

主 文

原略式命令を破棄する。

被告人を罰金二万五千円に処する。

右罰金を完納することができないときは、金五百円を一日に換算した期間、被告人を労役場に留置する。

理 由

大田原簡易裁判所が、被告人に対する傷害被告事件（同庁昭和四一年（い）第二〇三号）について、昭和四一年八月四日付の略式命令により、被告人の傷害の事実を認定して、同人を罰金三万円（不完納の場合は金五百円を一日に換算）に処し、右略式命令が同年八月二三日確定したことは、記録上明らかである。

しかしながら、刑法二〇四条、罰金等臨時措置法三条一項一号によれば、傷害罪法定刑のうち罰金の最高額は二万五千円であるから、これを超過して被告人を罰金三万円に処した右略式命令は、法令に違反したものであり、かつ被告人のため不利益であるといわなければならない。

よつて、刑訴法四五八条一号但書により、原略式命令を破棄し、被告事件につきに判決することとする。原略式命令によつて確定された傷害の事実法令を適用すると、右事實は刑法二〇四条、罰金等臨時措置法三条一項一号に該当するから。所定刑中罰金刑を選択し、所定金額の範囲内で被告人を罰金二万五千円に処し、換刑処分につき刑法一八条を適用して、主文のとおり判決する。

この判決は、裁判官全員一致の意見によるものである。

検察官 斎藤周逸公判出席

昭和四三年六月一四日

最高裁判所第二小法廷

裁判長裁判官 奥 野 健 一

| | | | |
|-----|---|---|-------|
| 裁判官 | 草 | 鹿 | 浅 之 介 |
| 裁判官 | 城 | 戸 | 芳 彦 |
| 裁判官 | 石 | 田 | 和 外 |
| 裁判官 | 色 | 川 | 幸 太 郎 |